Japanese Association of Russian Scholars

ロシア語ロシア文学研究 35（日本ロシア文学会，2003）

日，英，ロシア語における再帰的用法の対照分析

── 認知的アプローチ ──

村　越　律　子

1．問題設定

ロシア語の再帰代名詞には себя と свой があるが，本稿では себя とその短縮形に相当する -ся を扱う。再帰的用法は行為者の行う行為が他の事物に影響を与えるのではなく，行為者自身に及ぶという行為の再帰性を指して用いられる。そのために，これまでの再帰的用法の研究では，もっぱら主語と補語の同一指示性や再帰化規則の適用に伴う制約が取り上げられてきた（Пешковский 1956, Гловинская 1996, Падучева 2001 等）。本稿ではそういった統語論的側面ではなく，意味論的な側面に焦点を当てて論じる。ここでいう意味論的側面とは行為が行為者自身つまり話し手に及ぶとき，話し手は自己をどのように捉え，どのように概念化するのかという話し手の認知的な営みを指して言う（(1)参照）。

(1)　統語論的アプローチ　Иван　упрекает　себя.
　　（二つの名詞の同一指示性を扱う）　先行詞　再帰代名詞
　　意味論的アプローチ　Иван　упрекает　себя.
　　（同じ人の異なる側面を扱う）　主体　自己

この問題は久野（1973，1978）や Lakoff（1996，1999）によって取り上げられ，その後日英語の対照研究に発展した。日英語の対照研究では，両言語の照応体系の違いが明らかになってきている（神崎　1994，廣瀬　1997 等を参照）。一方，ロシア語の再帰代名詞について言えば，上に述べたような意味論的なアプローチからの考察はまだ行われていない。そこで，本稿ではこれまでの日英語の対照研究の知見をもとに，「自分」や -self と比較しながら，себя および -ся の一般的特徴を明らかにしていきたい。

なぜ日本語との比較なのかという疑問が生じるかもしれない。下の表(2)は себя の格変化に対応する「自分」と -self の語形変化を示したものだが，себя は「自分」と -self の両方の特徴を兼ね備えていることがわかる。ロシア語の себя は形態的にむしろ「自分」に近い。（対格までしか示していないが，本稿での議論にはこれで十分であると思われる。）

(2)

主格		自分が	
生格	себя	自分の	
与格	себе	自分に	my-/your-/him-/herself
対格	себя	自分を	my-/your-/him-/herself

себя においては主格が欠けている。-self と異なり，性，数，人称に関して無標であるので，主格以外では「自分」と一対一の対応関係が成立する。特に，人称に関して無標である点に注目すれば，себя は「自分」に近い振る舞いをするであろうことが予想される。ロシア語はヨーロッパ言語であることを理由に，これまでさまざまなテーマで英語をはじめとする他のヨーロッパ言語と比較対照されてきた。再帰代名詞もその例外ではない。そこで，一見，ロシア語とは全く無縁と思われるアジアの言語の人称体系を分析に利用することで，代名詞の研究に新たな視点を提供したいというのが筆者の考えである。

分析の手順としては，まず，①「自分」の主格の用法を説明し，②そこから派生する「自分」の再帰的用法と -self，себя の比較を行い，③それらを相対的に位置づけるような「話し手モデル」を提案する。そして，④このモデルにもとづいて「自分」，-self，себя（-ся）の意味を記述する。умываться 等の再帰動詞を形成する -ся は通常は代名詞として扱われないが，人の客体的側面を表すのは明らかなので，себя の対格と比較しながらその基本的な特徴を説明するつもりである。「自分」と -self の意味については，主として廣瀬（1997），鈴木（1973），池上（2000），Lakoff（1999）の考え方を採用した。本稿では，日，英，ロシア語の話し手に関する包括的なモデルを提案することを主な課題とし，個々の用法の詳細な検討までは行わない。

2．話し手は自己をどう捉えるか

2．1．言語使用の二つのレベル：私的表現と公的表現

われわれは言語でもって思考を表現し，それを他者

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

に伝えることができる。いわゆる言語によるコミュニケーションとは，ことばで表現した思いを他者に伝えるという思考の伝達行為をいう。一方，ことばで思いを表現するという思考の表現行為自体は必ずしも伝達を目的とする必要はない。廣瀬（1997）は伝達を目的とした社会的営みとしての思考表現行為を「公的表現行為」(public expression act）と呼び，公的表現行為で用いられる言語表現を「公的表現」と呼んだ。これに対し，伝達を目的としない個人的な営みとしての思考表現行為を「私的表現行為」(private expression act）と呼び，私的表現行為で用いられる言語表現を「私的表現」と呼んで区別した。公的表現と私的表現を区別するといっても，それぞれに対応して全く別種の異なる形式があるというのではなく，同じ表現が私的表現として用いられることもあれば，公的表現として用いられることもあるというように，その区別は言語表現の使用に関する異なる二つのレベルに対応するものである。公的表現行為と私的表現行為の根本的な違いは，前者では聞き手の存在を考慮に入れるが，後者では考慮に入れないという点にある。要するに，話し手には聞き手を想定しない思いの主体としての側面と，聞き手と対峙する伝達の主体としての側面があるということである。

こういった視点で見ると，日本語の「自分」の主格は私的表現行為の主体を表す。つまり，聞き手を想定しない思いの主体としての話し手の側面を指して用いられる。

(3)　自分は正しい。
(4)　私/僕/俺は正しい。
(5)　？自分/私は本を読んだ。

(3)は話し手の内部感情を記述する文である。心の中での言語による表出であり，誰かに向かって述べる文ではない。つまり，コミュニケーションを意図した発話ではない。(4)は聞き手を想定した言語による伝達が意図される場合の表現形式で，通常の発話である。「私」，「僕」，「俺」はいずれも話し手を指す名詞表現，1人称代名詞単数相当語句である。[1] 日本語にはIやяのように伝達の主体（＝公的表現行為の主体）を表す固有のことばがないので，話し相手に依存して自己を規定するこれらの言葉が用いられる(鈴木 1973：146-154)。「私」や「僕」以外にも数多くの自称詞があり，これらの公的表現は，例えて言えば，場面に応じて「自分」に着せ分ける衣服のようなものである。一方，(5)では本を読んだという事実が述べられていて，特別な文脈的情報がない限り，この文が話し手の内部感情を表しているとは解釈しにくい。「自分は本を読んだ」が容認性が低いのはこのためである。（もしもこの文が容認可能であるとすれば，それは，「自分は本を読んだ（と思う）」とか，「自分は本を読んだ（ことを知っている）」というような，話し手の意識作用が働いている読みをとる場合であろう。）

英語では，聞き手と対峙する伝達の主体としての話し手を表す固有のことばIがあり，Iとの関係でyouやheが体系づけられている。ロシア語においても同様で，話し手を表す専用のことばяがтыやон，онаと関係づけられている。しかし，どちらの言語においても，「自分」に相当する思いの主体を表すことばはない。これは人称の照応にどう反映されるだろうか。

2．2．人称の照応から見た日本語と英語とロシア語の違い

次の(6)−(8)の文の引用節はそれぞれ太郎，ジョン，イワンの内部感情を表している。従って，引用節は私的表現である。[2]

(6)　太郎$_i$は自分$_i$/彼$_{*i}$が正しいと思った。
(7)　John$_i$ thought that he$_i$ was right.
(8)　Иван$_i$ думал, что он$_i$ прав.

日本語の文では思いの主体は「自分」で表示される。三人称を表す「彼」を用いて太郎を指すことはできない。(6)の意味構造を〈Xは自分が正しいと思った〉のように書き表すとすれば，Xが誰であろうと，Xの意識の主体は「自分」で表すことが出来る。つまり，「自分」は意識の主体を表す固有の表現である。言い換えれば，意識の主体を表すのに「自分」以外のことばはいらない。一方，(7)(8)では，ジョンやイワンの思いの内容を表す引用節に人称代名詞he，онが用いられているが，これは英語やロシア語には意識の主体を表す固有のことばがないため，当該私的表現が誰のものか，つまり一人称のものか，二人称のものか，三人称のものかにより，本来的には公的な人称代名詞が私的な自己を表すのに転用されるからであると考えられる（廣瀬 1997：19)。(7)において，heがJohnを指すとは限らないのはheという代名詞が伝達者である話し手に結びつけられるためであり，伝達者にとってheでさすことができる第三者はJohn以外にも存在しうる。これは，英語が意識の主体を表す固有のことばを持たないがために支払わなければならない代価である。同じことはロシア語にも言える。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

ところで，日本語やロシア語では時制の一致がない。これに対し，英語では時制の一致がある。(7)では，引用節で述べられている出来事を伝達者の視点から記述しているのに対し，日本語の例(6)では，太郎の意識の観点から記述している。(8)においても，引用節の時制は現在形のままで，時制はイワンの意識の時間を指し示している。つまり，日本語やロシア語における時制の概念は本来的に意識の主体と結びつき，一方，英語における時制は伝達の主体に結びついている。人称と時制の照応から見ると，英語は公的表現行為と密接に結びついた言語，つまり本来的に伝達的な言語であり，一方，日本語は本来的に心的で非伝達的な言語であるという印象を受ける。そして，ロシア語は人称の照応は英語と同じ，時制の照応は日本語と同じという点で，両方の特徴を備え，どこかそれらの中間に位置づけられるようだ。

この節をまとめると，①「自分」の主格は意識の主体を表す，②意識の主体を表す固有のことばをもたない英語やロシア語では本来公的な人称代名詞が代用される，ということになる。

2．3．人の客体的側面

言語の使用という観点から見れば，「自分」は言語表現行為の私的なレベルにおける主体であった。一方，「自分」の斜格は意識の主体が働きかけるその人の客体的側面を表す。Lakoff（1999：268）は，人は主体と客体的自己の二つの側面からなると論じ，主体的存在を Subject，客体的存在を Self と呼んだ。Lakoff によれば，主体的存在としての人は，知覚，意志，判断などの意識主体であり，それ以外の側面はすべて客体的存在としての人に関わるものであるという。意識主体は現在においてのみ存在し，常に人として概念化される。一方，客体的側面は過去や未来においても存在し，また複数でもありうる。問題は，そのような人の客体的側面はどのように概念化されるのだろうかということである。つまり，話し手は自己をどのように捉えるのであろうか。そして，自己の捉え方は英語，日本語，ロシア語でどのように異なるのだろうか。これらの疑問に答えるために，この節ではまず Lakoff による -self の分析と廣瀬による「自分」の分析を紹介し，その後で，себя について論じたい。

〈英語 -self〉── Lakoff の分析

人の客体的側面としては，まず身体があり，その他性格，社会的地位，過去における発言，行為など客観的に捉えられる側面は Self とみなすことができる（wash myself, respect myself, express myself, etc）。Lakoff は，一般に主体と客体の関係のプロトタイプは主体が客体に働きかけることにあると言い，人は自分の身体に働きかけることによってさまざまな対象に働きかけることを学ぶと述べている。つまり，Lakoff に従えば，身体に対する働きかけ（body control）が英語における再帰的用法の典型ということになる。

〈日本語「自分」〉── 廣瀬の分析

再帰的用法の「自分」は主体から切り離され他者と同じ側におかれる自己を表す。主体と客体的自己は普段は一体化しているが，意識の主体が自己から離れることによって自己を他者の側に置くことができる（例：自分を見つめる，自分を発見する）。「自分」が記述するのはこの主体から切り離された自己のみである。英語のように主体の宿る身体やその部分を指して再帰的に「自分」とは言えない。人の身体やその部分は人の客体的側面ではあるけれども，主体が身体の中に宿っている限りは主体とその身体的自己の分離は成立しないからである。日本語では主体と一体化した自己を表す一般的なことばがない。人が身体に働きかけるときは，当該の身体部分を表すことばを用いなければならない（例：*自分/自分の顔を洗う）。これは，日本語の「自分」は思いの主体を表すのが本来的な用法であるため，再帰的用法では英語よりも多くの制約を受けるからだと廣瀬は論じている。要するに，「自分」は人の主体が働きかけるその人の分身なのである。英語においては，再帰代名詞の照応システムは人称代名詞同様，伝達の主体がその中心にあり，対他的に構成されている。それゆえ，主体と一体化していようがいまいが人の客体的側面を一般的に表すことができるのであろう。

〈ロシア語 себя〉

ロシア語には英語の myself のように公的表現行為の主体に直接結びつくことばがない。照応の特徴からわかるように，себя は人称代名詞の я との関係において伝達のレベルに間接的に結びついているだけである。себя が現れる典型的な文 X упрекает себя（X は任意の人）の意味構造を考えてみよう。この場合，X が誰であっても себя は不変であるところから，себя は客体的自己を表す専用のことばであると考えられる。себя は「自分」同様，意識の主体によって主体から切り離され，他者側におかれる自己を表す。主体と一体化した自己（＝身体的側面）は себя でなく-ся で言語化される（умываться，одеваться 等）。このことから себя は私的表現行為と結びついたことばであると言えよう。себя の私的な性格は次のような先行詞が明示されない文を見るとよくわかる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

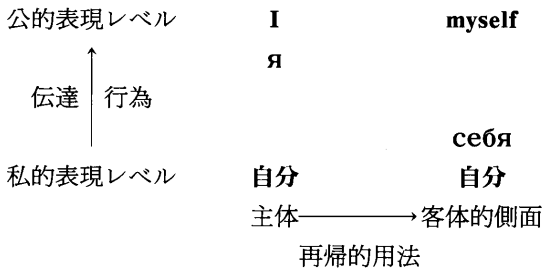
(9) Осознание себя может быть тяжким бременем. (Падучева 2001)

(10) Очень трудно сохранить себя честным человеком.

上の文の себя の先行詞は何なのかということが問題になるが，Падучева（2001：196）は先行詞は всякий человек であり，その中にはモデルとしての話し手も含まれると述べている。しかしながら，より正確に言えば，先行詞は話し手の意識の主体と考えるべきだろう。先行詞が明示されない文では，通常，人の意識作用を表すことばとともに話し手の主観的評価を表すことばが用いられるからである。その際，先行詞の解釈は文脈情報に従って話し手を含むさまざまな対象に拡大されると考えられる。いずれにしても，上のような文は日本語の話し手にはわかりやすい。себя には主格がないが，潜在的にあるかのように振舞っていると感じられる。

以上，日，英，ロシア語における話し手の客体的側面の表し方を概観した。これまでの考察をもとに，話し手を表すことばを相対的に位置づけると(11)のようになる。（日本語の「私」は伝達の主体を表す固有のことばではないので省いてある。）

(11) 話し手のモデル



I と myself は公的表現レベルに属し，myself は I に直接結びついている。話し手は自分をどう表すかという観点から見た場合，英語は公的表現行為と密接に結びついた，伝達的な性格が強い言語である。一方，「自分」は本来，意識の主体を表すことばで，そこから客体的側面を表す「自分」が派生したと考えられる。日本語は英語とは逆に，心的で非伝達的な言語である。これに対し，ロシア語の場合は，я が公的表現レベル，себя が私的表現レベルに属している。ロシア語は伝達的な主体と心的な自己をもった言語ということになる。（上図における I と я，себя と「自分」の上下関係は特別な意味を持たないことを断っておく。つまり，я よりも I の方がより公的な性格が強いという意味ではない。）ところで，я と себя の「スプリット」の関係は何を表しているのだろうか。まず第一に，話し手の自己の捉え方は，おそらく日本語や英語の方がわかりやすく，ロシア語の方が複雑であろうと予想される。伝達的な主体と心的な自己の対立の際立ちのなかに，ロシア人らしさを見ることができるかもしれない。そして第二に，себя の短縮形に相当する -ся の存在とその機能がある。себя と -ся という二つの形式の存在はこのスプリットと結びつけて考えることができそうである。この点については後でもふれるが，その前に，(11)の話し手モデルの妥当性を具体的な事例で検証する必要がある。

2．4．再帰的用法と視点的用法

I と myself は公的表現であり，二人称代名詞や三人称代名詞との対立関係によって体系づけられている。その意味ではこれらは対他的である。話し手は他者に対峙し，他者に働きかける存在として認識されるので，他者側におかれる自己も主体によって働きかけられる存在とみなされる（他者に対する働きかけについては前節の Lakoff の分析を参照。）逆にいうと，主体によって働きかけられる対象とみなされなければ，再帰代名詞化は起こりにくい。このことは次のような例で見ることができる。

(12) I pulled the knob toward me/*myself.

(13) He had an umbrella with him/*himself.

(12)(13)の文末の代名詞がなぜ再帰代名詞の形をとらないのかという点でよく問題になるが，文末の代名詞の指示対象は主語の行為の目標ではなく，行為の起こった場所の参照点になっているだけである。英語では自己が主体によって働きかけられる対象として認知されないと，再帰化規則は適用されにくいことを示している（cf. 池上 2000）。これに対し，ロシア語や日本語ではそのような制約はない(14)－(17)。これは，「自分」や себя が本来私的表現であることと関係があるように思われる。話し手の意識の主体は，他者に働きかける動作者というよりは，出来事を感受する経験者として認知されやすい。動作者に対峙する経験者は経験する「場所」と見ることができる。[3] それゆえ，再帰化規則がすんなりと適用されるのではないだろうか。

(14) Я посмотрел вокруг себя и увидел, что в комнате, кроме меня, никого нет.

(15) Сын попросил отца: «Возьми меня с собой».

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

(16) 自分のまわりを見てごらん。
(17) 太郎は自分の方に犬を招き寄せた。

次に，再帰的用法における照応の仕方を見ると，伝達の主体を表す固有のことばがある英語やロシア語とそのようなことばがない日本語との違いがわかる。単文においては，「自分」と -self，себя の同一指示性に基本的な違いはないが，複文では「自分」と -self，себя の振る舞いは異なる。

(18) John$_i$ thought that Taro$_j$ blamed himself$_{*ij}$.
(19) Иван$_i$ подумал, что Таро$_j$ винит себя$_{*ij}$.
(20) ジョン$_i$ は太郎$_j$ が自分$_{ij}$ を責めていると思った。

(18)の himself，(19)の себя はそれぞれ引用節の主語である Taro，Таро を指すことができるが，主節主語の John および Иван は指すことができない。英語やロシア語の再帰代名詞はそれを直接支配する述語表現を含む最小節内にその先行詞をとらなければならないが，これは，再帰代名詞の基本的機能が動詞の表す出来事の再帰性を表すことにあるということを示している。そもそも話し手が出来事の再帰性に関心を持つのは，話し手が他者の存在を意識し，他者との関係によって自己を規定するからであろう。そうであるとすれば，(18)(19)に見られる再帰化規則適用の制約は，公的な自己を表す固有のことば（=I，я）があるという事実によってうまく説明できそうである。

これに対し，「自分」は引用節内の主語である太郎だけでなく，主節主語のジョンを指すこともできる。「自分」にとっては意識の主体を表す用法が本務であり，再帰的な用法はそこから派生したにすぎない。従って，再帰化規則の適用が緩やかなのであろうと考えられる。

意識の主体を表す「自分」からは，再帰的な用法ではなくむしろ視点的な用法（empathy）が生まれる。(20)において，「自分」がジョンを指す解釈では，話し手の視点は明らかにジョンに近づいている。廣瀬の考えに従えば，話し手の意識の主体は自己を切り離して他者側に置くことができるが，さらに観察者として，自分が観察している状況の主体に自分の客体的自己を投影することができるのだという（廣瀬 1997: 56）。従って，状況の主体を指すのに「自分」が用いられると，その「自分」は話し手が状況の主体に投影した客体的自己を表す。そのように投影された客体的自己を表す「自分」は，話し手から見れば他者よりに位置するが，他者それ自体よりは話し手に近いという両面的な性格を持つ。一般に，状況の関与者が二人以上の場合，補文構造における代名詞化には話し手の視点が関わることが多い。その際，視点的解釈は「自分」を用いるか，人称代名詞（相当語句）を用いるかによって異なる。

(21) マーシャ$_i$ は太郎が自分$_i$/彼女$_i$ を責めていると言った。

上の文で，「自分」が選択されれば，話し手はマーシャの視点から出来事を述べていることになり，一方，「彼女」が用いられれば，話し手自身の視点から出来事を述べていることになる。マーシャの視点から出来事を述べるということは，話し手がその客体的自己をマーシャに投影しているということである。

観察者としての話し手が状況の主体に視点を近づけることを，他者側におかれた自己の投影という行為によって説明するならば，当然，ロシア語にも視点的操作が存在するはずである。себя は固有の，つまり唯一の客体的自己であり，話し手の私的表現行為に結びついたことばであるからだ。実際のところ，ロシア語では節を越えての再帰代名詞化は容認されないが，埋め込み文において日本語と同じような視点的用法が見られる(22)(23)。（視点に関しては，村越（1998）を参照のこと。）

(22) Иван$_i$ просит жену не винить себя$_i$/его$_i$.
(23) Он$_i$ всегда берется за трудные для себя$_i$ задачи; однако за слишком трудные для него$_i$.

(22)において，себя が選択されればイワンの立場から出来事を述べていることになり，его が選択されれば話し手が自分の視点で出来事を述べていることになる。また，(23)では，主語の評価と話し手の評価が対比されている。この文は，「彼は自分ではチャレンジしているつもりでも傍から見れば背伸びしている。」と言っているのである。英語ではこのような視点的用法は極度に制限されている(24)。

(24) *John asked Mary not to blame himself.

英語には客体的自己を表す専用のことばがないので，他者への自己の投影は不都合なのであろう。すでに述べたように，-self は公的表現行為に結びつき，その本来的機能は再帰的用法であり，自己に対する働きかけである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

以上，この節で観察したことをまとめると，公的表現レベルは再帰的用法を，私的表現レベルは視点的用法を説明する。伝達の主体としての話し手は，他者に対峙する存在として捉えられ，そのため客体的自己は再帰的用法に結びつく。一方，意識の主体としての話し手は，他者に働きかけるのではなく，出来事を受けとめ経験する感受者であるので，他者との心理的同調が生じやすい。客体的自己は他者との同一化を表す手段となりうる。これまでの議論で，話し手モデルの一般的妥当性を示すことができたと思うので，次節ではそのまとめとして「自分」，-self，себя，-ся の意味を定義する。また，最後の節ではその適用の一例として，これまであまり取り上げられてこなかった -ся のメトニミー的用法について述べておきたい。

2．5．「自分」，-self，себя，-ся が表す人の客体的側面

人には主体（Subject）と自己（Self）の二つの側面があるが，主体との関わりという点から見ると，自己は二つのタイプに分けることができる。

①主体と一体化し，主体に統率される自己。通常主体は身体的自己の中にいて自己を統率している。人の主体が身体の中に宿っている限りは，主体と自己の分離は成立しない。

②主体から切り離された自己。人の主体がその自己から離れると自己は他者と同じ側におかれる。主体と自己との分離が最も起こりやすいのは人の意識作用を表す出来事においてである。

これらの特徴にもとづいて「自分」，-self，себя，-ся の意味を定義したのが(25)である。

(25) 「自分」，-self，**себя**，**-ся** が記述する人の客体的側面

自分：主体から切り離された自己（例：自分を見つめる，自分を知る）。

-self：人の客体的側面全般―主体から切り離された自己のみならず，身体の部分のように主体と一体化し，主体に統率される客体的側面をも表す（例：know oneself, wash oneself, stretch oneself）。

себя：主体から切り離された自己（例：знать себя, винить себя）

-ся：主体と一体化し，主体に統率される自己（例：умываться, греться）

「自分」は意識の主体によって切り離された自己を表す。-self は主体に働きかけられる対象であり，身体の部分もそのような対象として捉えられている。一方，ロシア語では人の客体的側面を表すのに себя と -ся の二つの形式が用いられる。その用法の分布を見ると，себя は「自分」と同じ客体的側面を表し，-ся は -self の機能の一部を担っている。まさに，「話し手モデル」におけるスプリットの反映と言えそうである。身体的側面は，対自的に見れば主体から切り離せないけれども，対他的には自己として認知できる側面であることが -ся によって概念化されているのである。その両面性は，結局のところ，я と себя が異なる言語表現行為に結びつくということからきているのだろう。

2．6．メトニミー

ロシア語の話し手は，自分が統率できる自己とそうでない自己を区別するが，さらに興味深いのは，自分が統率できる領域を拡張しようとする現象が見られることである。このような自我の延長はメトニミー的拡張と呼ぶことができる。

(26) Я умываю свое лицо.

(27) Я умываюсь.

上の二つの文はいずれも「私は顔を洗う」と訳すことができる。(27)はメトニミー的表現で，この場合は全体（-ся すなわち себя）が部分（свое лицо）を表す関係になっている。人間には別々の事象の間に関連性を見つけて統合化する強い欲求があるが，こういった視点で見ると，(26)の文では，話し手が自分の顔という特定の身体部分に注意を向けているのに対し，(27)の話し手は，それが意識によって統率される自分，つまり主体と客体が一体化した存在としての自分に関心があると言えよう。このようなメトニミー的表現は英語にも見られる（例：I wash myself.）。しかし，ロシア語の特徴は，(27)に代表される身体的メトニミーが，話し手と近接性によって関連づけられる身体以外のものへと拡張していくことにある。しかも，現代のロシア語において，話し手によるそのような処理の仕方はかなり生産的である。(28)に若干の例を示す。[4]

(28) メトニミー的拡張の例：

высказывать свое мнение	→	высказываться
публиковать свою статью	→	публиковаться
собирать свои вещи	→	собираться
строить свой дом	→	строиться

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

тратить деньги/время → тратиться

(29) Он построился в центре города.

(30) Я не хочу, чтобы ты тратился для меня.

(31) Мы все еще стоим на дороге и починяемся.

(29)は「彼は市の中心部に自分の家を建てた」という意味だが，直訳すれば「自分自身を建てた」となる。まるで彼の身体が彼の新しい家の大きさまで拡張してしまったかのような感じであるが，これは本来，一人称である話し手の主観的な処理の仕方が三人称に関連づけられたものと考えられる。池上はこのような話し手の処理の仕方を主観的把握の拡張と呼んでいる。言い換えれば，話し手の概念から，話し手と近接性によって関連するものという概念へのメトニミー的過程に基づく拡張である。「例えば，自分の身体という概念が自分の身につけている衣服や器具をも含む形で拡張されたり，車を運転しているというような折，時として，運転している車全体の大きさにまで自分の身体が拡張されたかのように感じるといった場合，あるいは，自分の身内の者を文字通り自分自身と同等のものとして扱うといった型の拡張と同じである。」(池上 2000：285-288)。[5] 池上の考え方に従えば，主体に統率される自己が拡張されるということになるので，それが -ся によって表されたとしても不思議ではない。しかも，このような主観的把握の拡張が再帰代名詞において文法化されているというのは興味深い。

この種のメトニミーは生産的である。上の例は皆すでに社会的に慣習化され語彙化されたことばであるが，この他，話し手のパフォーマンスによってつくりだされるケースもある。

(32) Много надежд я связываю с Вероной. Много буду работать, чтобы закрепиться в команде.

サッカー選手にとってレギュラーポジションは大きな関心事である。(32)では，それを自分のアイデンティティとみなす話し手の気持ちが закрепиться において概念化されていると見ることができる。

3. まとめ

人を主体と客体的自己からなる存在とみなす視点から再帰的用法を観察した。ロシア語の再帰的用法について二つの特徴を挙げることができる。

① 客体的自己を表す себя は主体を表す я とは異なる言語表現行為に結びついている。я は公的表現行為に属し，伝達的であるのに対し，себя は私的表現行為に属し，心的である。このことから，ロシア語の話し手は他者に働きかける一方で，自己の内面への指向性をもっていると想定される。

② 話し手の自己に対する関心は，その主体が統率できる領域とそうでない領域を区別するという形であらわれる。さらに，話し手と近接性によって関係づけられる対象を自己のアイデンティティのもとに統合し，そのようにして統率できる領域を拡張しようとする傾向がある。

このような特徴から浮かび上がる話し手のイメージはどんなものだろうか。それは，独立し，個性を備えながらも，内向的で，強い空間意識を持った存在であろう。

（むらこし　りつこ・上智大学）

注

1 一般に，統語論者は「私」や「僕」を1人称代名詞として扱うが，意味論者は話し手を表す名詞表現とみなす。話し手や聞き手など人を表すことばについては，鈴木 (1973) に詳しい分析がある。

2 廣瀬によると，直接話法の引用部は公的表現であり，間接話法は公的表現を私的表現に転換するための文法的手段であるという。

3 池上 (2000) は，〈モノ〉と〈トコロ〉を人間の最も基本的な認知的選択とみなし，主語優先型と話題優先型，有界性と無界性，完了と未完了，動作者と感受者などの対立概念は，つまるところ〈モノ〉と〈トコロ〉という捉え方に結びつけることができると述べている。詳しくは，池上 (2000) の第二部（〈モノ〉と〈トコロ〉―その対立と反転）を参照のこと。

4 このタイプの再帰動詞は，伝統文法では間接再帰代名詞と呼ばれている。

5 英語では，A Mercedes rear-ended *me*.〈ベンツが私（の車）に追突した。〉のようなケースがこれに相当する。

参考文献

Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. (1999) "The Self." *Philosophy in the Flesh*. N. Y: Basic Books, 267-289.

Lakoff,G. (1996) "Sorry, I'm Not Myself Today: The Metaphor System for Conceptualizing the Self." *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago: University of Chicago Press, 91-123.

Langacker, R. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1. Stanford: Stanford University Press.

Гловинская, М. Я. (1996) "Активные процессы в грамматике." *Русский язык конца XX столетия*. Москва: Языки и русской культуры, 292-304.

Падучева, Е. В. (2001) *Высказывание и его*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

соотнесенность с действительностью. Москва: УРСС.

Пешковский, А. М. (1956) *Русский синтаксис в научном освещении*. Издание. 7-е. Москва: ГУИМПР.

Суржикова, Н. Я. (1979) *Возвратные глаголы русского языка в упражнениях и заданиях*. Москва: Русский язык.

廣瀬幸生（1997）「人を表すことばと照応」『日英語比較選書4』中右実（編）研究社出版，1-89。

池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』講談社.

久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店。

久野　暲（1978）『談話の文法』大修館書店。

神崎高明（1994）『日英語代名詞の研究』研究社出版。

村越律子（1998）「視点制御—所有代名詞と再帰代名詞」『ロシア語ロシア文学研究　第30号』日本ロシア文学会，93-107。

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書。

Ritsuko MURAKOSHI

Contrastive Analysis of Reflexivization in Japanese, English and Russian — A Cognitive Approach —

This paper deals with a contrastive analysis of reflexives *-self, jibun* and *себя* (*-ся*) by means of the cognitive approach.

A distinction between the public self and the private self is crucial to my analysis. Briefly, the public self is the subject of communication, whereas the private self is the subject of consciousness or monologue. Another factor that plays the central role in the study is a distinction between two components of a person — the Subject and the Self. The Subject is the locus of consciousness, will and judgment. The Self is that part of a person that is not picked out by the Subject — the body, social roles, actions and so on. Thus the private self and the public self, on one hand, the Subject and the Self, on the other, are basic concepts that are used here to account for the semantics of reflexives. The conclusion is:

① English is a communication-oriented language. Through interaction with other people or objects, the speaker of English learns to control them and himself. Self control, especially body control, is the key to understanding the semantics of *-self*.

② Japanese, by contrast, is a monologue-oriented language. The speaker of Japanese is conceptualized as someone who experiences the state or event rather than interacts with the world. *Jibun* represents the speaker's *bunshin*, or another self.

③ Russian is complex. The speaker of Russian is interested in exercising control over other people, but at the same time he is introversive. The split between *я* and *себя* explains some interesting phenomena, such as the use of a grammaticalized enclitic form *-ся*, the speaker's empathy and development of metonymical expressions.

NII-Electronic Library Service